

Ⅱ-3 ICU使用教材への評価 (Course Evaluation より)

平田 泉

〔はじめに〕

過去何年かに渡って各学期末に行われた学生によるコース評価の中から、1991年春学期・秋学期・冬学期分の教材への評価の結果をまとめ、ここに報告する。使われたコース評価用紙に複数の種類があること、また評価用紙への答え方がコメント形式であるために結果を数量的に処理することは難しいと思われる。従って、次の様な方法で結果をまとめていくことにする。先ず、各コース毎に代表的な評価の言葉・主なコメントを挙げ、学生がどんな視点から教科書を見ているか、また評価の言葉とそれが表す教材評価の視点はクラスのレベルによってどう変わるのかをみる。最後に、今後の課題として、学生の評価が示唆するICUが現在使用している教材の問題点をまとめてみる。

〔コース評価用紙に関して〕

コース評価用紙はコース全体を評価するための様々な項目からなっているが、ここでまとめるものはその中の1項目である教材についてのみである。先に述べたように、使われた評価用紙の教材の項目には4つのバリエーションがある。これを評価用紙Aタイプ・Bタイプ・Cタイプ・Dタイプとする。各々、該当する教科書について下記に挙げられた点から学生が評価・コメントを書くようになっている。

表1 評価用紙 Aタイプ)

(評価用紙 Bタイプ)

(評価用紙 Cタイプ)

IV. 教材 (Teaching materials) 教科書について (Textbook) ハンドアウト (Handouts)	IV. 教材 (Teaching materials) 教科書について (Textbook) 本文 (main text) 語彙 (vocabulary) 漢字 (kanji) 練習 (exercises) その他 (others)	IV. 教材
--	--	--------

〔評価用紙 Dタイプ〕

IV. 教材について
漢字
読解テキスト

評価用紙Aタイプ・BタイプはJapaneseシリーズとIntensive シリーズ(外国人学生対象)に、Cタイプ・DタイプはSpecial Japanese(帰国子女対象)に使われているが、特にAタイプ・Bタイプに関しては挙げられている項目が各々のコースの教材に適していない場合がある。また「本文」・「ハンドアウト」・「練習」といった項目が何をさすのか明確でない学生もみられた。更に、コメントの中には教材というよりは授業の時間配分や教授方法等やり方に関するコメントも少なくない。これは教材と授業のやり方が切り離せないものであることを改めて示すものであるが、教材の評価という点からは調査の精度を欠くものともなり、設問の適切さを問われる。これらの点は今後改良されるべき点である。

〔評価結果のまとめ〕

ICUの日本語プログラムにはJapanese 6 及び Intensive 3 の次のレベルにくるコースとして Advanced 1・2 があるが、今回の資料にはこのレベルの回答がない。従って、今回の結果は外国人学生対象のコースの初級から中級の終わりまでと帰国子女対象のコースに関するものとなる。

先ず、各コースの使用評価用紙タイプ、使用教材、評価用紙の回答数を表にまとめる。但し、使用教材の欄は当該の三学期間に使われたものの延べリストで、各学期に、挙げられた教材全てが使われたとは限らない。

表2

コース名	使用教材	使用評価用紙	回答数
Japanese 1	・ICU 初級日本語教材 I	A	10
Japanese 2	・ICU 初級日本語教材 II	B	5
Japanese 3	・ICU 初級日本語教材 III ・日本語基本文法辞典	A・B	32
Japanese 4	・Japanese by the Total Method IV ・Current Japanese ・「窓際のトットちゃん」	A・B	32

	・シナリオ		
Japanese 5	・新聞で学ぶ日本語第Ⅰ集 ・新聞のコピー	A・B	47
Japanese 6	・新聞で学ぶ日本語第Ⅱ集 ・「かさじぞう」「坊ちゃん」 ・「朝日新聞の声」を聞く ・「雪国」一部 ・「男はつらいよ」 シナリオ一部	A・B	35
Intensive 1	・ICU 初級日本語教材 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ・日本語基本文法辞典	A	17
Intensive 2	・Modern Japanese for University Students Part II ・「日本語読本 中級」一部 早稲田大学 ・「中級からの日本語 読解中心」一部 ・「Japanese Life Today —現代日本事情」一部 ・「インタビューで学ぶ 日本語」一部 ・「ロールプレイで学ぶ 日本語」一部	A	9
Intensive 3	・Modern Japanese for University Students Part III ・「国際都市・東京」 ・「中級からの日本語」一部 ・新聞記事 ・映画のシナリオ	A・B	13
Special Japanese	・注解 書き取り・ 読み方テスト ・「日本人と アイデンティティー」 ・新聞・コピー	C・D	51
			計251

次に、評価に使われた代表的な言葉と、コメントで言及された点を各コース毎にまとめてみる。評価の言葉には「とても」・「まあまあ」・「やや」等の程度を表す副詞が付くケースが幾つかあったが、ここでは省略する。

Japanese 1:

- ・良い
- ・好き
- ・役立つ
- ・OK
- ・悪い
- ・好きではない
- ・難しい

- ・まとまりが悪い。
- ・日常生活に応用できない内容。
- ・教科書を全部使わなかった。
- ・フォーマットが好きではない。
- ・効果的で、得るところが多い。
- ・ハンドアウトは自分の理解を知るためのもの。
- ・ハンドアウトには時間を使わない。
- ・ハンドアウトがバラバラで、整理できない。

Japanese 2:

- ・良い
- ・好き
- ・役立つ
- ・OK
- ・十分
- ・悪い
- ・難しい
- ・役立たない
- ・十分ではない

- ・使わなかった部分がある。
- ・製本せよ。
- ・教師なしでは理解できない。
- ・追っていくのが難しい。
- ・試験のためにどのように勉強してよいかわからない。
- ・学習する漢字／漢字語彙の意味を漢字教科書に載せよ。
- ・「一度に多く」ではなく、「毎日少しずつ」に。

Japanese 3:

- ・役立つ
- ・好きではない
- ・まあまあ
- ・良い
- ・OK
- ・適当
- ・役立たない
- ・好きではない
- ・大嫌い
- ・良くない
- ・易しすぎる
- ・十分ではない
- ・実用的ではない
- ・多すぎる
- ・理解しにくい
- ・ひどい
- ・退屈

- ・文法説明がはっきりせず理解困難。
- ・分冊はやめて一冊に。
- ・ドリルを全部はやらなかった。
- ・多すぎて、身に付けるのが困難。
- ・文法に関するハンドアウトは役立つ。
- ・練習の形式が分かりにくい。
- ・より良い文法説明を教科書につけよ。
- ・ある文法事項が何処に出ているか分かりにくい。
- ・漢字教科書に部首とふりがなを加えよ。
- ・もっと単純・簡潔なフォーマットにせよ。
- ・クラスでしか使わなかった。
- ・試験の準備に使えない教科書だ。
- ・各課の学習項目を示せ。
- ・文法のハンドアウト以外は紙の無駄。
- ・ハンドアウトは試験準備に役立つ。
- ・ハンドアウトはサイズがバラバラでまとめるのにくい。
- ・情報量が多く、得るところが多い。
- ・練習にもっと重きを。
- ・漢字クラスのやり方を改良せよ。
- ・語彙・場面は実用的だが、習ったことの応用練習する機会がない。
- ・教科書によらない授業を楽しんだ。

Japanese 4:

- ・OK
- ・良い
- ・役立つ
- ・面白い
- ・まあまあ
- ・実用的
- ・良くない
- ・面白くない
- ・つまらない
- ・退屈
- ・ひどい

- ・教科書は一冊に。
- ・教科書の構成がきちっとしている。
- ・会話に使える言葉が多い。
- ・専門分野の語彙をもっと多く。
- ・日常レベルで使う語彙・漢字をもっと多く。
- ・学習する語彙・漢字が多すぎる。
- ・漢字の筆順・読み方・その漢字の基本単語が

- 与えられ、勉強に便利。
- ・日本文化がわかる。
- ・ハンドアウトは文法の面で助けとなる。
- ・ハンドアウトは教科書へのよい補充。
- ・役立たないハンドアウトも多い。
- ・ハンドアウトから成っているようなコースで構成がきちっとしていない。
- ・習った語彙・文法をドリルのようなもので強化する機会を。

Japanese 5:

- ・面白い
- ・役立つ
- ・良い
- ・助けになる
- ・やり甲斐がある
- ・最高だ
- ・効果的だ
- ・好きだ/ 好ましい
- ・OK
- ・楽しい
- ・難しい

- ・今のもの、最近のものを扱っていて、よい。
- ・自分が生教材を読んでいることに驚く。
- ・面白ければ、学生は勉強に打ち込む。
- ・時事問題にもっと集中すべき。
- ・ペースは丁度いい。
- ・教材は製本せよ。
- ・漢字・語彙の意味を与えよ。
- ・語彙の意味を自分で調べるのは語彙習得の助けとなる。
- ・多様性があって良い。
- ・新聞記事のみでなく、日本の民話・伝説なども。
- ・ハンドアウトは文法の助けとなる。
- ・文型は実用的で役立つ。
- ・ハンドアウトのサイズを統一せよ。
- ・ハンドアウトが多すぎる。(過剰の情報・語彙は役立つものでも消化できない。)
- ・難しいが、達成感がある/面白い。

Japanese 6:

- ・面白い
- ・良い
- ・価値がある
- ・役立つ
- ・実用的
- ・楽しい
- ・やり甲斐がある
- ・まあまあ
- ・悪い
- ・お粗末
- ・ひどい
- ・ばかばかしい
- ・単純
- ・無意味
- ・難しい
- ・大変
- ・変
- ・不必要

- ・文法説明・文法練習が不十分。
- ・あるものは専門的すぎる。
- ・トピックは面白い。
- ・論議をよぶところがよい。
- ・日本社会を内省するのに価値がある。
- ・新聞記事のみでなく、エッセイ・小説・歴史なども。
- ・主題の背景の説明を与えよ。
- ・身につけるのには時間が少なすぎる。
- ・学習したものが繰り返してこない。
- ・意見を述べる練習を多くせよ。
- ・コースで何を要求されているのか不明確。
- ・もっと日常的・実用的なものを。
- ・読解が強調されすぎる。
- ・準備(予習)に時間がかかりすぎる。
- ・多様な事柄を扱っていて、よい。
- ・もっと多読を。
- ・やり甲斐はあるが面白くない。
- ・ハンドアウトは役にたつものもある。
- ・ハンドアウトが多すぎる。
- ・ハンドアウトはサイズ・内容にまとまりがない。

Intensive 1:

- ・便利だ
- ・好きだ
- ・良い
- ・OK
- ・助けになる
- ・好きではない
- ・大雑把
- ・知的・専門的でない
- ・役立たない

- ・漢字の筆順・意味・読み方を与えよ。
- ・大雑把で、授業の準備ができない。
- ・教科書をもっとコンパクトに。
- ・文法(の問題点の)説明をもっと。
- ・各課の学習項目を課の始めに明示せよ。

・役立つ

Intensive 2:

- ・良い
- ・面白い
- ・役立つ
- ・助けになる
- ・好きではない
- ・貧弱
- ・難しい
- ・専門的
- ・面白くない
- ・役立たない

Intensive 3:

- ・面白い
- ・役立つ
- ・満足できる
- ・得るものがある
- ・助けになる
- ・OK
- ・退屈
- ・面白くない
- ・役立たない
- ・難しい
- ・無意味
- ・不十分

Special Japanese:

- ・良い
- ・適当
- ・普通
- ・見やすい
- ・まあまあ
- ・ためになる
- ・面白い
- ・楽しい
- ・奥深い
- ・OK
- ・興味深い
- ・読みやすい
- ・わかりやすい
- ・文句なし
- ・つまらない
- ・難しい
- ・多すぎる
- ・大変
- ・不要
- ・読みにくい
- ・理解しにくい
- ・理解できない
- ・哲学すぎる

- ・一課のフォーマット・ポイントが分かりにくい。
- ・基本構文は復習に役立つ。
- ・ドリルは日常生活のよい例。
- ・ハンドアウトは紙の無駄。
- ・ハンドアウトは文法理解を助ける。
- ・ハンドアウトは役立たない。

- ・興味の幅の広い学生向き。
- ・専門的なものだけでなく、文学も。
- ・語彙の意味はローマ字表記でなく、仮名表記で。
- ・難しく、面白くない。
- ・差し替えたものは面白い。
- ・読み物を選ぶ総合的な基準・方法論がないようだ。
- ・本当の日本語を。(⇒ 新聞記事を)
- ・役に立たない文法・語彙を扱っている。
- ・多様な分野を扱っていて、面白い。
- ・ハンドアウトは全部は消化できない。
- ・あるハンドアウトは紙の無駄。
- ・ハンドアウトのレイアウトはよい。
- ・書き方の授業が貧弱。

- ・学生に関係のあるもの、知的な刺激のあるものを。
- ・時事との関連のあるものを。
- ・日本社会とその現状に関係したものを。
- ・漢字の意味・筆順・部首等を与えよ。
- ・教え方を工夫せよ。
- ・授業でもっと語彙・文型の強化・応用作業を。
- ・文法ドリルが不十分。
- ・日本語での実際の作品を扱うのはよい。
- ・日本文学の基礎知識があたえられた。
- ・内容に多様性がある。
- ・(自分の)書く力が読む力に大きく劣る。
- ・クラスの外でも使える語彙・文型を。
- ・ハンドアウトは役立つ。
- ・ハンドアウトは役立たない。

- ・諺などは習う必要がない(自然に覚える)
- ・ためになるが使わない漢字がある。
- ・レベル・量とも適当。
- ・偏らず全体的に学べた。
- ・いい教養になる。
- ・習う方法がいい。
- ・様々な言葉・諺・慣用句が覚えられる。
- ・教材は問題ないが使い方がだめ。
- ・もっと実用的な教材・ドリルを。
- ・自宅で読み、クラスで討論という形態がいい
- ・読めば読む程、中身の濃さがわかる。
- ・思想・物の考え方においても勉強になった。
- ・内容に大きく影響を受けた。
- ・いろいろな本の抜粋・新聞雑誌記事を。
- ・読んで楽しい。
- ・内容が面白くないのでやる気がなくなる。

- ・内容はクラスで読むには不適當、一人で読むと得るものがある。

〔観察／分析〕

始めに、〔評価結果のまとめ〕から評価に使われた主な言葉を取りあげ、それらが学生が教科書を評価する際のどんな視点を表しているか考えてみる。

表4 〔評価に使われた言葉〕

〔それらが表していると思われる視点〕

・好き／好きではない	⇒	・内容に対する感情的な反応
・役立つ／役立たない	⇒	・内容の有益性
・易しすぎる／難しい	⇒	・内容の難易度
・良い／悪い	⇒	・内容の質
・十分／十分ではない	⇒	・量
・実用的／実用的ではない	⇒	・内容の有益性（使えるか・使えないか）／質
・退屈	⇒	・内容に対する感情的な反応
・楽しい	⇒	・内容に対する感情的な反応
・面白い／面白くない	⇒	・内容に対する感情的な反応／質
・満足できる	⇒	・質／量
・やり甲斐がある	⇒	・学習の意義
・価値がある	⇒	・学習の意義
・無意味	⇒	・内容の有益性／学習の意義
・不必要	⇒	・学習の必要性
・専門的／専門的ではない	⇒	・質
・知的／知的ではない	⇒	・質

上記の表で、評価に使われた言葉の各々に設定した視点が正しいとすると、1991年春学期・秋学期・冬学期に日本語のコースを取った学生は、

- 1) 内容に対する感情的な反応
- 2) 内容の有益性
- 3) 質
- 4) 量
- 5) 学習の意義

を主要な視点として教科書を評価していたといえることになる。

次に、使われた評価の言葉をシリーズ別に分類し、表にしてみると一つの傾向が観察される。

表5 [Japaneseシリーズ(外国人学生対象)]

J 1	好き 好きではない	役立つ	難しい	良い 悪い	
J 2	好き	役立つ	難しい	良い 悪い	十分/十分ではない
J 3	好き 好きではない	役立つ	易しすぎる	良い	十分ではない 退屈 実用的ではない
J 4	—	役立つ	—	良い 良くない	退屈 実用的 面白い/面白くない
J 5	好き	役立つ	難しい	良い	面白い 楽しい やり甲斐がある
J 6	—	役立つ	難しい	良い 悪い	実用的 面白い 楽しい やり甲斐がある 価値がある 無意味 不必要

[Intensive シリーズ(外国人学生対象)]

I 1	好き 好きではない	役立つ 役立たない	難しい	良い	便利 専門的ではない 知的ではない 大雑把
I 2	好きではない	助けになる 役立たない	難しい	良い	専門的 面白い/面白くない
I 3	—	助けになる 役立つ 役立たない	難しい	—	面白い/面白くない 退屈 無意味 不十分 満足できる 得るものがある

[Special Japanese (帰国子女対象)]

SP	—	—	難しい	良い	面白い つまらない 楽しい 不必要 ためになる 興味深い 奥深い 理解しにくい/しやすい/ できる
----	---	---	-----	----	---

各シリーズの傾向：

Japaneseシリーズ(外国人学生対象)

先ず注意を引くのは「役立つ」、「易しすぎる／難しい」、「良い／悪い」が初級から中級終わりまでの全てのコース（J1～6）に現れていることである。学生はコースのレベルには関わりなく内容の有益性、難易度、質を評価の基本視点とするようだ。

初級の特徴の一つは内容への感情的反応を表す「好き／好きではない」が全コースにわたって使われていることである。この言葉は中級に入ると、ほぼ完全に使われなくなる。代わって感情的反応を表すものとして「面白い／面白くない」が使われる。この言葉はまた質を表す言葉でもある。中級後半では非常に肯定的で余裕のある感情を表す「楽しい」がこれに加わる。

初級の質は基本的には「良い／悪い」で表されているが、初級終わりになると、これに「実用的／実用的ではない」が加わり、質と有益性に言及する言葉として中級終わり（J6）まで使われる。初級後半では質のみではなく、量への視点も出てきて「十分／十分ではない」が使われるが、これはこのレベルで留まり中級以降にはつづかない。

中級後半では「やり甲斐がある」に表されるような学習の意義からの評価がなされるのが特徴である。「価値がある」、「無意味」もこの視点（学習の意義）からの評価だと考えられる。但し、「無意味」は有益性にも言及する。

Intensive シリーズ(外国人学生対象)

「役立つ／役立たない」（有益性）、「難しい」（難易度）、「良い」（質）が初級から中級終わりまでのほぼ全てのコース（INT1～3）に現れていること、初級の内容への感情的反応を表す言葉が「好き／好きではない」であることはJapaneseシリーズの場合と同様である。が、Japaneseシリーズの初級後半で使われた「十分／十分ではない（量）」、「実用的／実用的ではない（質／有益性）」は全く現れない。代わって、Japaneseシリーズには全く現れなかった「専門的・知的／専門的・知的ではない」が質に言及する言葉として現れ、中級前半まで使われる。これはJapaneseシリーズを取る学生は実用性を期待し、Intensive コースを取る学生は学究性・専門性を期待していると読み取れ、各々のシリーズの基本的性格・ゴールと矛盾しない。

初級における「好き／好きではない」に代わって、中級前半・後半にわたり「面白い／面白くない・退屈」が感情的反応及び質を表す言葉として使われること、また中級後半では「得るものがある」、「無意味」という言葉を使って学習の意義と有益性に言及するこ

とはJapaneseシリーズと共通している。しかし、Japaneseシリーズ中級後半にでてくる「楽しい」という学習への精神的余裕を思わせる言葉が現れないのはIntensive という性格上うなづける。

Special Japanese(帰国子女対象)

「難しい(難易度)」、「良い(質)」が現れるのは他の2つのシリーズと同様である。他の2つのシリーズに出てきた「好き/好きではない」(感情的反応)が出てこないのは一見Special Japaneseの特徴のように思われるが、このコースがJ6及びINT3より上のレベルのコースであることを考えれば出てこないのは当然で、「好き/好きではない」を初級の特徴とすることを支持する現象と見なせる。

「役立つ/役立たない」は他の2つのシリーズでは全てのレベルのコースに渡って現れる言葉であるが、「好き/好きではない」と同様、このコースには現れていない。Special Japanese は帰国子女の総合的漢字力の向上という特定の、明白な目標の下に用意されており、コースを履修する学生の目的との間にズレがない。学生には必要とするもののみが与えられ、また本来そうあるべきコースであるので、「役立つ/役立たない(有益性)」という視点はあえて言及するに及ばないのであろう。

「面白い/つまらない(感情的反応/質)」、「ためになる(学習の意義/有益性)」が現れているのは他の2つのシリーズの中級以上のクラスの場合と共通している。

Japaneseシリーズの中級後半に現れ、Intensive シリーズの中級後半には現れなかった「楽しい」という感情的反応はこのコースには現れている。Intensive シリーズのみに出てこないのは、intensive という時間に追われがちな状態では「楽しむ」という心の余裕を持つことは難しいということなのであろう。また、学習行為及び学習内容を楽しめるようになるのは概して中級後半以降であることも示唆されている。

「理解しやすい/しにくい/できる」はこのコースの読解教材への評価であるが、同じく読解作業を行っているJapaneses シリーズとIntensive シリーズには全く出てこない。これは、外国人学生の場合は中級後半のレベルでは読解に当たってまだ言語面(文法・構文・語彙・表現等)で力を使うことが多く内容そのものに学習の焦点が行きにくい、帰国子女の場合は一般に漢字力とそれに関する言語力の不足が主な問題であるので、漢字力が向上すれば読解作業においては学習の焦点が容易に内容そのものになりうるからだと考えられる。

以上性格の異なる3つのシリーズの評価の言葉を見てきたが、その結果をまとめると次

のように言えるだろう。まず、学生は教材を評価する際にはどのレベルのコースにおいても基本的に「役立つかどうか（有益性）」、「難しいか（難易度）」、「良いか／悪いか（質）」の3つの視点から見る。

感情的反応も評価に現れるが、その反応は学習者の（コースの）レベルによって変わる。初級では「好きかどうか」、中級以降では「面白いかどうか」、中級後半以降では「楽しい」がその代表的なものである。感情的反応の変化には、始めはもの全体に感覚的に反応、次にものの内容に反応、更に進むとそのものを使っての学習行為に肯定的・積極的に反応するようになるという流れを仮定できそうである。

質に関する評価は各シリーズに共通の点とそうでない点とがある。共通点はほぼ全てのレベルのコースで「良い／悪い」という一般的な評価が使われること、また「良い／悪い」の他に別の評価が出てくるのは初級の終わりまたは中級の始めからであることである。共通でない点はこの別の評価である。one year regularと研究生の外国人学生を基本的な対象とするJapaneseシリーズでは「実用的かどうか」、four year regularの外国人学生を基本的な対象とするIntensiveシリーズでは「専門的・知的かどうか」、帰国子女対象のSpecial Japaneseでは「奥深い／哲学的すぎる」が挙げられていて、各々のタイプの学生のニーズ・要望に基づき評価がなされていることが窺われる。

量への言及はJapanese2とIntensive3の2つのコースで「十分／不十分」という評価がでているのみであるので、ここでは普遍性を持たない現象として扱っておく。

〔学生のコメントから見た教材に関する問題点〕

最後に、学生が挙げたコメントに見られる教材の問題点のうち、重要だと思われるものをまとめて挙げる。

1. ICU初級教材試用版はフォーマット、文法解説、扱う文法項目等の点で改良を続ける必要がある。また、初級教材の場合は、与えられた教材の内容を授業で全てこなさないことに対して学生が心理的な抵抗感を持つことが顕著に現れている。この点を教材改良の面からどのように解決できるだろうか。（これらの作業は現在進行中）
2. 教材を補完するものとしてかなりの量のハンドアウトが学生に渡されているが、その全てが役に立ち、活用されているわけではない。少なくない数の学生が必ず身に付けるべき情報と参考としての情報の区別ができず、情報量に圧倒されるのみに終わってしま

うのではないのだろうか。ハンドアウトの内容も様々であろうが、作成の際にはその内容にハンドアウトという方法が適切かどうかを常にチェックしたい。教室作業として行うべきことをハンドアウトで処理するような場合があるとすれば、努めて避けたい。教科書が用意されている場合はハンドアウトはあくまで「番外」であり、数が少ないに越したことはないと認識した方がよいだろう。また、学生がファイルし保存することを考えれば、サイズやフォーマットの統一を図るのが親切である。

3. 中級以上では時事、文化、社会、歴史、文学、その他専門分野のもの等を扱うことを希望する声が多い。また、トピックの多様性も肯定的に評価される。それだけに「読み教材を選ぶ際の総合的な基準・方法論がないようだ」というコメントは重要である。先ずコースのゴールとそのコースでの読む作業の位置づけを考えることから、読み教材選択の総合的基準設定と方法論確立への作業を始めることができるのではないだろうか。
4. 当然のことであるが、学生は中級以降も初級と同様語彙・文型・文法・表現の充実した提示・練習作業を望んでいる。これに答えるために教師は授業内容とともに教材の面でも研究や改良が求められる。
5. 漢字学習では、筆順は別として読み方・意味は自分で調べるあるいは授業で提示することが漢字の定着を助けるものとして教材に意図的に載せていないコースが多い。しかし、学生は調べる時間は練習・応用に使いたい、また授業は「提示」という学生にとって受け身の形ではなく、「実際に使ってみる」という能動的な活動に多く時間を使うことを望み、筆順・読み方・意味は基本的な情報として教材に載せるべきだという考え方が強い。教師の側としてはここで漢字学習のどの部分を自習にまかせ、どの部分をクラス活動とするかを再考し、その結果によって教材の改良を行う必要があるだろう。
6. 中級後半で注意を引くコメントは「面白ければ、言われなくても学生は勉強に打ち込む」である。「学生が、言われなくても勉強に打ち込む」のはまさに教師の望むところであり、教師はこのことを常に頭において教材の作成・選択・改良・開発にあたりたい。

〔結び〕

今回コース評価のまとめと分析を行い、これからの教材を考えていく上で重要な幾つかの示唆を受けた。以後は、コース評価用紙を改良し、引き続きコース評価を実施、そのまとめと分析を重ねて、今回得た示唆の検証と教材の改良及び開発へとつなぎたい。